



学校法人  
鎌倉女子大学

## 産学連携プログラムから

### 見えてくる学問の可能性

神奈川県経済同友会が主催する「神奈川産学チャレンジプログラム」が、今年で8回を数えます。この企画の趣旨は、同友会に加盟する企業と県下の大学が協同して課題・解決型研究のコンペティションを実施し、創造的に仕事と取り組むことの出来る人材を育成しようということにあります。

回を重ねるごとに成長し、今年は、28企業が36テーマを提示し、これに対し、16の国公立大学、220チーム、延べ728名の学生たちが参加、思い思い工夫をこらした解決策を提案したということです。

本学は、第5回から参加し、これまでも家政学部の武井安彦教授ゼミナールの学生諸君が優秀賞を受賞したことがありましたが、今年は、同じ学部の徳橋敬一教授ゼミナールの学生諸君が「最優秀賞」を、しかも2年連続して受賞してくれました。

徳橋チームが手がけた今年のテーマは、京急ビルマネジメントが出題した「鉄道高架下のイメージを変え、利用したくなるような施設の提案」といったもので、具体的には京浜急行「三浦海岸駅」の遊休地となっている高架下を甦よみがえらせようとするものです。

企業側の要望は、①三浦海岸駅は土地柄からしてどうしても賑わいが夏期のみ集中する傾向があり、年間を通しての収益性において難がある、②従って集客力の高い空間を設しつらえ、年間にわたる経済効率を高めると同時に、③殺風景な空地に代わる好ましい空間を駅周辺に創出し、④周辺地域の活性化につなげたいというところにあったようです。

そこで、徳橋チームは、提案の前提としてさまざまな調査をくまなく繰り返しました。①まず桜木町、鶴見、新橋、有楽町、秋葉原、千葉、町田、南太田、黄金町といった既に活用されている主だった場所の特徴の調査、②海岸駅周辺500メートル圏内の店舗・住宅・環境の調査、③時間帯によって異なる乗降客の傾向の調査、④騒音の調査、⑤特産品を活用すれば、店舗内で販売する物品の価格を安価に抑えられると考え、三崎港から水揚げされる水産物や三浦半島の農産物の活用の検討。

こうした調査・分析を前提に、徳橋チームが提案したのは、次のようなプランニングでした。①まず利用者が思わず入ってみたいくなるような三浦らしい海のイメージの導入ゾーンの形成、②三浦半島にちなんだ店舗群の構想、③光と風と水と魚をテーマに母親や子どもが自由に遊べるコミュニティー広場の設置、④そこではコンサートが開かれ、水族館があり、ナマコにさわれ、マグロの解体ショーも行われ、足湯も出来、昼は家族連れが多いところからカフェが、夜は仕事帰りのサラリーマンが多いところからバーに衣替えと。

更に、このチームの手堅さは、初期投資、人件費、運営費、広告費、8年での黒字転換といった、計画の裏づけに欠かせない収支についての経済的分析を怠らないことです。

私は、徳橋チームのプレゼンテーションを聞きながら、女子大学ならではの学風の可能性を感じました。やや<sup>おおぎょう</sup>大仰にいえば、これまで本格的に議論されてきたとは言い難い学問の可能性と言い換えても構いません。

と申しますのは、長らく近代の学問は、冷ややかな理性の物差しに合わせて現実を理解することを建て前としてきました。その模範的なものがデカルトという数学者の採った方法で、彼は、現実を数量的に理解する方法を愛好しました。確かにこの方法は、極めて正確無比な物の見方ではありましたが、しかし逆に私たちが生きる最も具体的な生活世界の現実がこの数量化の網の目からこぼれ落ちていってしまうという弱点を抱えもっていました。人によって感じ方の異なる場の雰囲気などは、数量化の網の目にひっかからない特徴的なものでしょう。

恐らく今回のような研究は、むしろ女性らしい感性に基づいて在るがままの現実を理解しようとしなければ、模範解答は書けないように思われます。入口はこんなイメージがいい、こんな色彩や形態だと人が入りやすい、あそこの高架下は暗く治安に不安な印象を与えていたが、私たちは統一的な照明に配慮して管理がゆきとどいている印象を与えたい、こんなお店の配列だと楽しくショッピングが流れていく、このくらい歩くと子どもは飲み物を欲しがり、お母さんは買い物にも疲れてくるだろう、それならこの辺りにお楽しみ広場やカフェがなければ、夜の乗降客の傾向を考えるとバーがあってもよさそう。こうした生活世界の分析や創出は、単に経済学によるものでも、社会学、建築学によるものでもなく、そうした合理的な学問の網の目からこぼれ落ちてしまう非合理性も含んで成り立つ現実をきめ細やかに<sup>すく</sup>掬いあげる学問でなくてはならないはず。それは、合理性ばかりで造り上げられた空間が却って<sup>かえ</sup>生きづらいことを見ても、分かること。ですから、生活世界に対する明敏な感覚を基調とした学問が必要となるのであり、学問が理性ばかりに基づくものと考えたのは、近代の錯覚だったのかも知れません。勿論、徳橋チームが実際活用したようなさまざまな計量科学の恩恵にも浴さなくてはならないわけですが、学問史の中で置き忘れられてきた感性を通じて世界を解き明かす生活学が本格的に構想されていかなければならないように私には思えてくるわけです。

[>前のページへ戻る](#)